

會津八一の歌碑について（斑鳩、佐保）  
 Consideration about the monument in which I  
 described the Japanese poem of 31 syllables  
 by YAICHI AIZU (Ikaruga, Saho)

小竹 光夫  
 Mitsuo Shino

### 要旨

本論は、拙論「一碑百想Ⅰ・Ⅱ」を総論としながら、書文化財の発掘を行っていく営みの一つとして位置付けられるものである。「一碑百想Ⅱ」の「おわりに」では、「万葉集関連書碑」への展開を提案しており、その中でも書者として會津八一を例示している。

會津八一は東洋美術史の専門家という域に留まらず、歌人・書人等々、さまざまな分野で広範かつ深い見識を示した文化人である。各地に数多くの歌碑が建立されているが、特に奈良には思い入れが強かったと見え、県内各地を巡りながら歌を詠み、独創的な文章を残している。「會津八一の歌碑について」と題した本論では、それらを紐解きながら万葉の世界へのアプローチを試みようとしている。西の京に続き斑鳩・佐保の書碑を取り上げ、論じることとする。

キーワード：會津八一 歌碑 斑鳩 佐保

### はじめに

會津八一が、明治14年8月1日に新潟市中央区古町五番町に生まれたことは既に述べた。料亭「會津屋」の次男であり、生まれた日付から「八一」と命名された。古町といえば新潟の中央に位置する繁華街ではあるが、結局は雪深い越後の出身ということになる。

最初に手をつけた文芸分野は俳句であり、群を抜く才能を発揮したことから、新潟県尋常中学校（現新潟県立新潟高等学校）卒業後、『東北日報』『新潟新聞』の俳句選者となっている。この俳句での才能開花に大きな影響を与えたのが、俳句革新運動に取り組んでいた正岡子規である。中学卒業後、上京した會津八一は新潟の文人良寛等々を正岡子規に紹介するとともに、交流を深めていったものと考えられる。東京専門学校に入学後は、講師であった小泉八雲の英文学史を受講し、英米の文化への関心を高めた。早稲田大学文学部卒業後は、新潟県中頸城郡板倉町（現上越市）にある有恒学舎（現新潟県立有恒高等学校）の英語教師として赴任したことは前論で触れている。つまり、新潟と東京の往還を繰り返すものの、身分が英語教師でもあり、基本的には奈良との直接的な縁があるわけではない。

そんな會津八一が奈良に関心を持ち、どのような形で東洋美術研究の道に進んでいったのか。本論では、その道

筋を明らかにしながら、途上に登場する斑鳩や佐保の書碑について、幾つかの考察を加えたいと考えている。

## 1. 會津八一と奈良との出会い

新潟市會津八一記念館編の「會津八一年譜（奈良を中心に）」を参考にしながら、會津八一と奈良がどのような形で接近していったのかを、多少、詳しく見ておきたい。

西の京を扱った際、下掲のような簡略な紹介はしている。

明治41年（1908）、初めて奈良を旅する。

明治43年（1910）、有恒学舎を辞任し、上京。早稲田中学校に英語教師として着任。

大正2年（1913）、早稲田大学文学部英文学科の講師となる。

大正9年（1920）以降、足繁く奈良を旅する。

前掲の「會津八一年譜（奈良を中心に）」では、第一回の奈良旅行を次のように述べている。

明治41 1908 年齢27

8月4日夜～14日 大阪着。その後初めて奈良地方を旅行し、短歌二十首を詠む（後に「西遊咏艸」と題する）。東大寺大仏殿、春日野、新薬師寺、春日若宮、若草山、法華寺、秋篠寺、西大寺、法隆寺、法輪寺、法起寺等を巡遊し、奈良では対山楼に泊まり、法隆寺村では「かせや」ととまる。

西の京には至らなかったものの、現代で言ういわゆる「観光スポット」を10日間をかけて網羅しているのが分かる。かなりの短時間の滞在であったであろうが、「鹿鳴集」の後記に、「初めて奈良地方に遊び、古蹟を巡り美術を賞して感慨浅からず」と記しており、極めて好印象、収穫の多い第一回の旅行であったようである。この第一回の奈良旅行では対山楼に宿泊しているが、以後は日吉館を定宿とした。奈良への訪問は、昭和25年に至るまで数えられる限り35回に及んでいる。

明治45 8月 知多半島、奈良、大阪、京都、宇治、大津

明治39 12月29～31日 法輪寺、法隆寺、中宮寺、當麻寺

大正10 1月1～5日 大安寺、法華寺、海龍王寺、浄瑠璃寺等

大正10 8月 東大寺、新薬師寺、法隆寺、橘寺、室生寺、大野寺等

10月22～27日 十輪院、法隆寺、薬師寺、唐招提寺、菅原神社、秋篠寺、地獄谷等の石仏、福智院等

11月18日 正倉院（雨天のため開扉されず）

大正11 1月2～5日 地獄谷等の石仏

10月27～11月13日 正倉院、奈良帝室博物館、東大寺転害門、北山十八間戸、般若寺、不退寺、海龍王寺、法華寺、薬師寺、唐招提寺、喜光寺、法起寺、法輪寺、中宮寺、法隆寺、東大寺、三月堂、新薬師寺、河内観心寺等

大正12 8月20日 室生寺

大正13 1月1日 訪問先記録なし

大正14 3月22～26日 吉野、香具山、山田寺址、聖林寺、豊浦等

11月6日 正倉院、法隆寺東院等

大正15 3月 訪問先記録なし

昭和3 10月 唐招提寺、東大寺戒壇院、奈良帝室博物館、法隆寺等

	年末～新年	奈良地方巡遊
昭和4	3月27日	学生を引率した古刹巡り（第一回）
	10月20日～	学生を引率した奈良旅行

昭和4年3月27日、奈良への旅行の回数でいえば17回目となるが、このあたりから會津八一の奈良旅行の形態が明らかに変容する。つまり、学生を対象とした「引率」あるいは「研究指導」のためとなり、個人の資料収集や研究という目的からは離れたものとなる。大正12年に「奈良美術研究会」、昭和5年に「早稲田大学東洋美術史学会」を創設し、自らが会長となっており、一研究者というより研究の先導者としての位置付けを明確にしてきたと考えることができよう。最終35回目の奈良旅行は、前述の通り昭和25年3月14日であり、「日吉館に宿泊した後、東大寺観音院に2泊」という記録が残っている。

異聞ではあるが、第一回の奈良旅行は、本来、友人同行で明治41年の3～4月に行われる予定であったが、当該時期に「ひとりで行く。ひとりということにつきて何事も問うことなかれ。僕もまた何事も語ることなかれ」との手紙を友人に送っており、いわくある予定変更であったと思われる。

## 2. 法隆寺（斑鳩）に所在する會津八一の歌碑について

平成26年（2014）年11月7日、移設という珍しい形であるが、法隆寺の夢殿近く（中宮寺に向かう途上）に一基の會津八一歌碑が建てられた。

あめつちに われひとりゐて たつごとき  
このさびしさを きみはほほゑむ  
法隆寺東院にて  
秋艸道人



図1 原家歌碑

『會津八一のいしぶみ』には、「原家歌碑」と紹介され、歌人である原玉泉氏による由縁が述べられている。原氏によれば、「恰もよし、私の家は夢殿の北百メートルの所にあるのです」ということであるが、個人宅にあった珍しい碑ということになる。昭和54年（1979）の建立であるが、原氏亡き後に、歌の対象である救世観音がいます法隆寺夢殿近くに移設されたことになる。残念ながら原家を訪れたことはない。移設によって、初めてこの碑に接した次第である。

記録に寄れば、「通称万劫石、学名は閃緑玢岩に薬研彫り」とあり、碑石としては美しい。「薬研彫り」とは、漢方薬を粉碎する際の薬研のように、V字に掘り下げる方法である。陰影がはっきりと出やすく、線に緊張感が感じられる刻法であると言える。立地の良さと合わせ、美しい歌碑である。

平成26年（2014）11月7日、西院伽藍の西に新しい歌碑一基が建立された。同年11月8日の奈良新聞は、「60年

ぶりの悲願達成」と題して、その歌碑除幕の様子を伝えている。

かつて、「新しい碑ほど刻法に問題がある」と述べたことがある。残念ながら、この碑も例に漏れず線の弱さを感じざるを得ない。文字に墨を入れているが、僅か数年で墨色が消え、視覚的にもバランスの悪さを露呈している。さらに、生け垣に守られるような立地で、碑本体だけでなく、回り込んで碑背の文面を読み取ることも難しい。

礎石には、図3のような由来が刻まれているが、あまりの悪文に哑然とする以外ない。句読点をどこに打っているのか、という基本的な問題もあるが、最終の4行は、ネットか何かの解説をコピーしてきたのではないと思われるほどの無神経さである。フルネームならばまだしも、「會津」と呼び捨てにし、果ては「新潟市生」の下に3字分の無用な空白がある。

碑背の新潟市會津八一記念館館長神林恒道氏の文も同様であるが、完全に字粒が横並びの形で揃ってしまっている。通常、漢字仮名交じりの日本語を手書きという形で書き表すときは、漢字と仮名とでの大小によって字粒が横に整列することはない。疑われるのは、この碑石を刻

した業者が「ワープロ原稿」を使ったのではないかという点である。折角の立地でありながら、碑としてはかなりレベルの低い作となってしまっている。奈良新聞にも言う通り、前述の「原家歌碑」と同日の除幕式となったが、圧倒的格差のある皮肉な2碑が法隆寺に出現したこととなる。

ちとせあまり みたひめくれる ももとせを  
ひとひのことく たてるこのたふ

遡ること2年、平成24年（2012）に参道入口の法隆寺 i センター（観光案内所）前に、一基の歌碑が建立されている。「ちとせあまり～」と同様、聖徳太子1300年大遠忌に奈良を訪れた際の會津八一の歌が刻まれている。

うまやどの みこのまつりも ちかつきぬ  
まつみとりなる いかるかのさと



図2 奈良新聞 2014.11.7

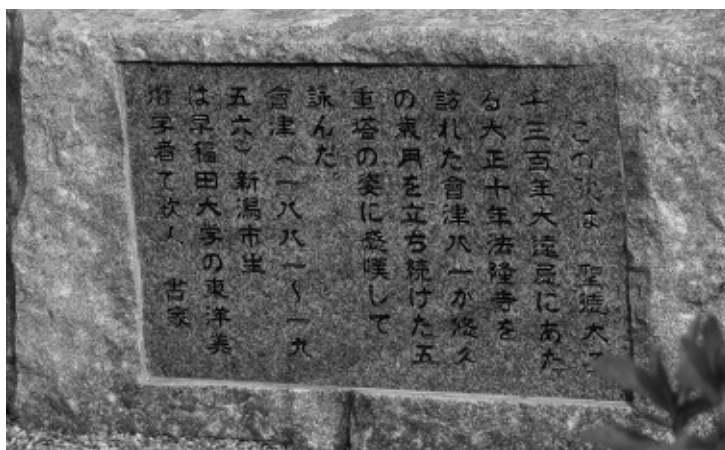


図3 ちとせあまり歌碑礎石





図4 ちとせあまり歌碑

歌の内容からすれば、当然の立地であろうと思われるが、いわゆる観光案内所の入口である。まして駐車場に沿った建物であり、境内の碑に比べて地の利は得ていない。しかし、この碑はそのようなことを齒牙にも掛けず、凜として屹立している。碑背の斑鳩町長小城利重氏の文も、明朝体ではあるが格調高く、強い。

（字詰めママ）

わが郷土斑鳩は、飛鳥時代に仏教文化を導入し、新たな国づくりを進めた聖徳太子が斑鳩宮を営んだ地である。

大正十年、千三百年の御遠忌前に、太子を尊崇する秋艸道人會津八一が訪れ、当地の歴史と自然に魅了されて歌を詠んだ。

斑鳩町制六十五周年記念に八一の歌碑を建立し、太子の遺徳を偲ぶとともに郷土の発展と世界の平和を祈念する。

平成二十四年九月九日 撰文 斑鳩町長小城利重

200字にも満たない短文での記載であるが、これ以上、足す必要も引く必要もない揺るぎのない表現である。

先に「通常、漢字仮名交じりの日本文を手書きという形で書き表すときは、漢字と仮名とでの大小によって字粒が横に整列することはない。」と記しているが、本碑は明朝体であり字粒の横への揃いは気にならない。さらに、改行も言葉の切れ目が考慮されており、極めて「気の利いた表現」がとられている。碑全体に、何かしら思い入れが感じとられる良碑である。

調べていく内に、「左野勝司」という人物に行き当たった。『石ひとすじ 歴史の石を動かす』という著書もある、奈良市在住の石工であるという。当該年の9月11日付けの読売新聞には、

奈良市の石工、左野勝司さん（69）が、町内の藤ノ木古墳の石棺開棺を成功させた縁から、「斑鳩の役に立てるなら」と制作し、寄贈した。

とあった。「仕事」としてだけでなく、このような「思い」が込められている碑は清々しい。



図5 石ひとすじ表紙

色紙かなにか、方形の用紙に書かれたものを写したのであろうか。右下に「秋艸道人」の落款印が押されている。連綿は後半部の「とり」と「奈留」の2箇所のみ。「読めるものでなければならない」という會津八一の書作そのものを具現化している表現であり、佇んで歌のリズムそのままに朗詠することが可能である。特に微細な筆致、筆の動きを石に写した「技」は見事で、「高松塚古墳やアンコールワット（カンボジア）の復元修復を担当した」と紹介される左野氏の、文化に対する造詣の深さを感じさせて心地良い。奈良県内に20基に及ぼうとしている會津八一の歌碑の中でも、白眉と称して良い碑ではないかと思われる。

### 3. 中宮寺（斑鳩）に所在する會津八一の歌碑について

法隆寺の項の冒頭で触れた「原家歌碑」を過ぎると、中宮寺に至る。かつての国分寺が傍らに国分尼寺を従えていたことを考えれば、法隆寺が僧寺、中宮寺が尼寺という位置付けであったのであろう。本尊の国宝菩薩半跏像（寺伝如意輪観音像）も優雅さを漂わせ、黄花を咲かせる山吹の生け垣沿いに歩みを進める境内も、細やかな配慮が感じられる。ただし、改修・改築によって鉄筋コンクリートへと転換した金堂の無機質さは、如何ともしがたいものとなってしまった。現在、本堂に安置される菩薩半跏像は、国宝第1号として知られる京都広隆寺の弥勒菩薩半跏思惟像とともに、仏教美術の傑作と称される作であるが、何分にも法隆

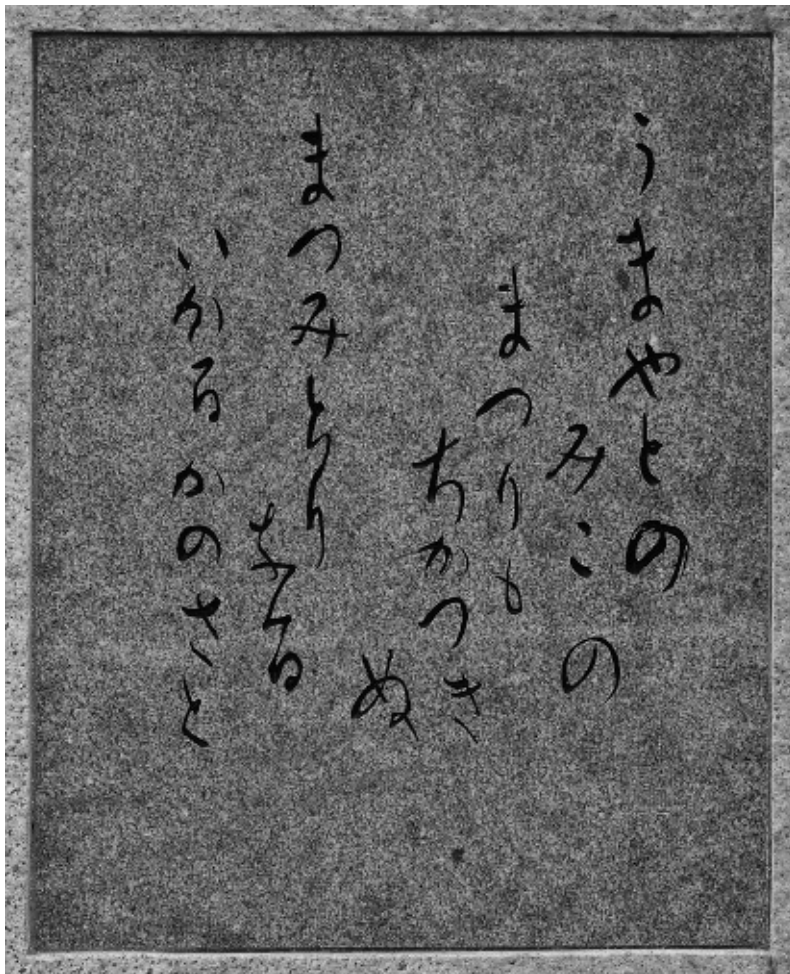


図6 うまやどの歌碑



図7 みほとけの歌碑

寺の奥の奥に位置するという条件下、訪れる人は限定的である。

生け垣沿いに回り込むと昭和43年（1968）に建立された本堂へと至る。設計者は、和風の数寄屋建築の近代化を進めた吉田五十八である。外観的には伝統を活かした美しさは感じるが、鉄筋コンクリートという質感は、前述の通り無機質さを拭えない。その本堂、さらには菩薩半跏像に直面する形で、會津八一歌碑は建立されている。平成22年（2010）11月29日のことである。

新潟市會津八一記念館に残る原本を併せて掲げているが、良質の碑面に筆の跡を忠実に再現していると言えよう。

みほとけの あことひちとに あまてらの

あさのひかりの ともしきろかも

傍らに添えられた由来を記す碑文には、

みほとけの あごとひちとに

あまてらの あさの



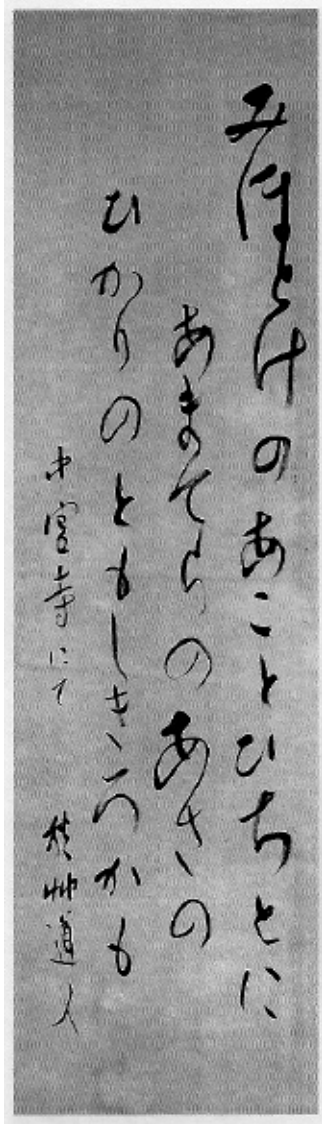


図8 みほとけの墨書原本

ひかりの ともしきろかも

中宮寺にて 秋艸道人

「南京新唱」より

會津八一（あいづやいち 一八八一～一九五六）新潟市出身  
早稲田大学名誉教授。新潟市名誉市民、東洋美術史学者であり、  
歌人、書家でもあった。秋艸道人または渾齋と号する。

八一は大正九年十二月に中宮寺ご本尊を拝する。朝の光が  
み仏のあごとひじにはんのりと射していた。静寂で清々しいご本  
尊のお姿に心ひかれて、八一はこの歌を詠んだ。

平成二十二年十一月二十九日建立

中宮寺會津八一歌碑建立の会

新潟市會津八一記念館の原本に添えられる解説には、

大正九年（一九二〇）十二月、八一は中宮寺の菩薩半跏像を見学した。中  
宮寺の朝の光が菩薩半跏像のあごとひじのあたりにほんのりと射してい  
る。尼寺の朝の雰囲気とあいまって菩薩半跏像のやわらかで神秘的なお  
姿に八一は心惹かれて詠ったのだろう。

とある。この解説を完全になぞる形で由来が記されているのは明らかであるが、  
それにしては「あさの」「ひかりの」の改行は無神経である。概して、法隆寺境内  
等々の會津八一歌碑については、どうも腑に落ちないぞんざいさがつきまとい  
ている。

現在、斑鳩三塔と言いがされ、法隆寺の五重塔、法輪寺・法起寺の三重塔と  
並ぶ風景を賞賛することが多いが、かつては中宮寺にも三重塔が存していたと記  
録にある。旧中宮寺址の整備が進んではいるが、こと中宮寺に関しては謎多き状  
態のままで解明は進んでいない。法隆寺再建・非再建の論争が盛んに行われたが、  
斑鳩という地に関しての今後の研究が進展することを、切望する次第である。

#### 4. 法輪寺（斑鳩）に所在する會津八一の歌碑について

仏教が国家宗教の中核として位置付けられていた時代、いわゆる「官立」の寺社は興隆を極めた。その実際は疑  
われるところであるが、全国各地に配置されたという国分寺・国分尼寺なども、国家の支えを失うやいなや急速な  
衰退を始めた。現在、「国分寺」は地名等などには遺されているが、総国分寺であった東大寺以外は目立った痕跡  
すら遺していない。つまり、檀家寺のような収入源を持たない官立の寺は、その支えを失って衰退する以外なかつ  
たのである。現代では、文化財や国宝指定という方法によって、僅かではあるが経済的支援が可能となっているが、  
「国宝指定」を解除された寺は運営に苦悩することとなる。法輪寺は、そんな「国宝指定」を解除された寺の一つ  
である。

先に述べた斑鳩三塔の一翼を成していた法輪寺であるが、昭和19年（1944）7月21日の雷火によって国宝三重塔  
を失うこととなった。住職二代にわたる三重塔再建の発願・勧進、作家幸田文をはじめとした数多くの大衆の支援  
を受けながら、昭和50年（1975）11月に再建の落慶法要が行われた。しかし、塔自体が全焼であったため、国宝指

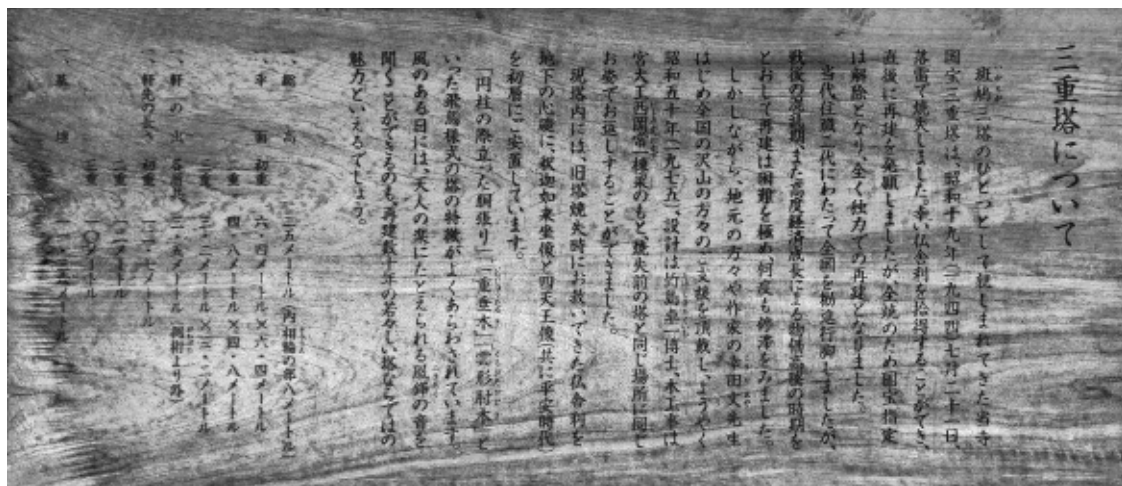


図9 法輪寺三重塔解説板



図10 くわんのんの歌碑

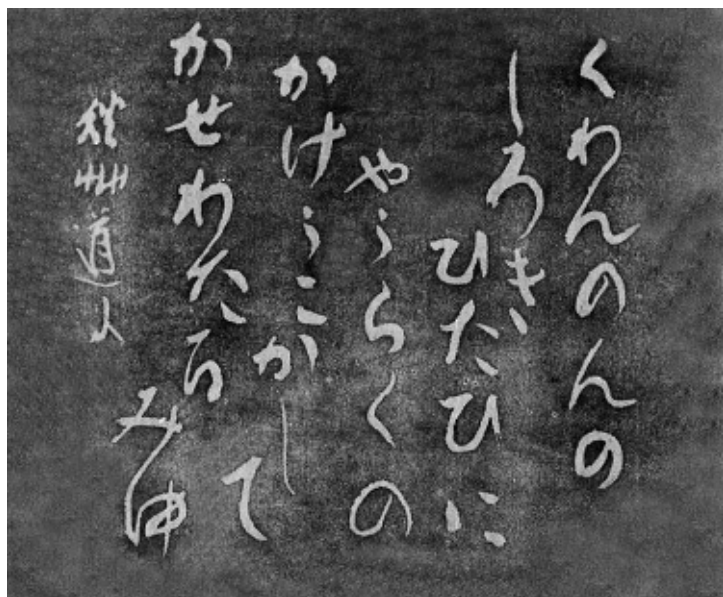


図11 くわんのんの歌碑拓本

定を解除された。その経緯等々と無念さを滲ませる思いは、塔前に立てられる由来に詳しく記されている。

會津八一歌碑は、そんな法輪寺講堂（収蔵庫）に向かって右手にひっそりと建てられている。かなり目立たぬ存在であり、うっかりすると見落としてしまう。そんな存在である。

くわんのんの

しろきひたひに やうらくの

かけうこかして かせわたるみゆ

秋艸道人

生駒石の自然石を矩形に抜き、歌を刻んでいる。昭和35年（1960）11月15日という古い建立である。最終字の「ゆ」のみが変体仮名であるが、會津八一はこの表現を多用していて不自然さはない。何分にも石の目が荒く、目を凝らさない限り読み取りにくい。手持ちの拓本を、参考として掲げておく。

二玄社刊の『會津八一と奈良』に掲載される墨書は、縦長の条幅形式の墨書であり、この碑の書きぶりよりは自在であるが、用字等も全く異なっている。法輪寺という立



地を考えれば、朴訥とした現在の碑面の文字が似つかわしいと感じる。

観音の しろきひたひに

や宇らくの

可けうこかして

かせわたるみ由 秋艸

道人（「朔」の落款印）

## 5. 海龍王寺（佐保）に所在する會津八一の歌碑について



図12 しぐれあめ歌碑

西の京の総論に例示した総国分尼寺法華寺に近接するのが、海龍王寺である。位置的には平城京跡の東方に位置する。法華寺や海龍王寺がある一帯は、最初、藤原不比等の邸宅が存在していた。そのため、不比等の死後は娘である光明皇后が相続し、天平17年（745）にはこれが宮寺（のちの法華寺）となった。一方、海龍王寺は、「隅寺」や「隅院」、「角寺」、「角院」などと呼ばれていた。「隅寺」とは、現在の法華寺の東北の隅にあったためとされているが、創建や由来についての詳細は不明である。寺宝は五重小塔である。かつて奈良町全域を境内としていた元興寺にも同様の五重小塔があるが、海龍王寺の小塔はさらに小さい。

鄙びた山門をくぐると、すぐに寺域の端に突き当たるような小さな寺である。草木生い茂り、探しあてのさえ困難な状況ではあるが、一隅に會津八一歌碑は建っている。

しぐれあめ いたくなふりそ こんたうの

はしらのまそほ 可へに奈かれむ

秋艸道人

刻法はごちなく、粗い。前掲『會津八一と奈良』には、原本と思われる墨書が掲載されているが、草をかき分けて確認する限り、落款の下に押印されている「朔」の印は、碑刻では脱落しているように見える。堂々として存在し続ける歌碑もあれば、草に覆われながら存在さえ消えようとしている歌碑もある。単に古色蒼然という時代による変容とは違い、記憶の中から退化していく現状を見ながら、文化としてどのように継承していくべきか、考えることは多い。

## おわりに

今回、斑鳩の碑についてのおおよそに触れたが、法隆寺南東に位置する上宮遺跡公園に所在する歌碑については述べることを控えた。上宮遺跡公園を法隆寺遺跡公園と紹介する資料もある。しかし、「聖徳太子ゆかり」という

だけで、法隆寺として括るのには賛同しがたい。歌碑や碑面は文献等で確認はしているが、建碑由来についての疑問が残る点、さらに実際の踏査をしていないことが取り上げていない理由である。

若い女性による「御朱印巡り」「御朱印収集」が一つのブームとなり、寺社や歴史的な建造物に若者の関心が向くようになった。「何の事前準備もない興味本位」との批判はある。しかし、行けば何かが見つかるわけではないが、実際に現地を訪れ、風土や歴史を体感することは今だから必要なことではないかと思う。「人間性の喪失」が囁かれる今日、日本や郷土の歴史を知ることは、自らを知り深めていくための大切な行動である。難しく「研究」とだけ考えることなく、「考えるきっかけ」として捉え、さまざまな人々が多種多様な方法で「歴史の回廊を旅する」ことは貴重であると考ええる。

「文学碑巡り」と称する旅もまた、文学や歴史に携わった先人たちや歴史を知るものである。今回も触れてはいるが、歌碑や文学碑に添えられる銘板や由来記は再考が必要である。読む限り興味関心を喚起するものは少ないし、特に以降の向学心をそそるものは皆無に等しい。建碑という方法が、どちらかと言えば「申し渡す」という権威的な色彩を持っているためかも知れないが、「記録」という域を越え、時代に適合した形で変革されていくことを望みたい。

【収集資料】＊引用参考文献としてだけでなく、収集資料としての意味合いを含めて記載している。

- ・『會津八一歌がたみ』 小笠原 忠 著 1967年1月25日 宝文館出版株式会社
- ・『會津八一の歌碑』 早稲田大学・文学碑と拓本の会 1968年11月3日 株式会社二玄社
- ・『會津八一の世界』 宮川寅雄 著 1978年9月5日 株式会社文一総合出版
- ・『會津八一と奈良 -歌と書の世界-』 西世古柳平 著 1992年10月15日 株式会社二玄社
- ・『會津八一 個人主義の軌跡』 堀 巖 著 1996年10月25日 株式会社沖積舎
- ・『會津八一とゆかりの地』 和光 慧 著 2000年1月12日 株式会社二玄社
- ・『會津八一のいしぶみ』 財団法人會津八一記念館 監修 2000年11月15日 新潟日報事業社
- ・『奈良の古寺と仏像 -會津八一のうたにのせて-』

平城遷都1300年記念「奈良の古寺と仏像 -會津八一のうたにのせて-」展資料

大林一章、神林恒道 清水眞澄 鷲塚泰光 監修 日本経済新聞社

- ・奈良新聞 2014年11月7日付け紙面
- ・『石ひとすじ 歴史の石を動かす』 左野勝司 2009年12月1日 学生社
- ・法輪寺三重塔解説板